

# 「内田祥三談話速記録」(三)

聞き手・村松貞次郎

〔前書き〕

ここに紹介するのは、昭和四十三年二月十七日から十一月一日にかけて、全十六回にわたって行われた内田祥三の談話の書き起こしである。内田祥三は、大正から昭和にかけて東京帝国大学教授を務め、建築・都市行政において大きな影響力を持った人である。また建築家としても多くの作品を残し、東京大学内では関東大震災以後のキャンパス復興の責任者であった。後に第十四代総長を務め、戦時下の困難な時期に大学行政の任にあたった。

『内田祥三先生作品集』（非売品、昭和四十四年十一月三十日発行、内田祥三先生眉寿祝賀記念作品集刊行会編集、鹿島研究所出版会発行）の「あとがき」によれば、出版部会は、「四十三年の一月から数十回先生のご自宅にて委員が長時間に亘り」打ち合せをした、という。従って、談話はその打ち合せの一部ということになる。実際、作品集を読むと、談話と同じ文章、内容が少なからず含まれていて、談話が作品集を編纂するために企画されたことが判る。聞き手は故村松貞次郎（東京大学名誉教授）（当時、生産技術研究所助教授）

である。

底本は、大学史料室所蔵の「内田祥三先生談話」と題されたフイルを用いた。鉛筆書きのものをゼロックスコピーして綴じたものである。

今回は座談の第五回（昭和四十三年三月十五日）、第六回（同三月二十六日）を収録する。

凡例

1. 原文は、談話の録音テープから書き起こされたものであり、誤字・脱字などが散見されるので、最小限の訂正を加えた。句読点も最小限の訂正を加えた。
2. 人名は、判明する限りにおいて氏名を調べ、（ ）で補ったが、不明のものは仮名のままにしておいた。建築名も、原名称、建設年を（ ）で補った。また書き起こしのなかの？マークも、不明なものはそのままのこし、（？）マークで示した。

○第五回（昭和四十三年三月十五日）

村松 内田先生のお話第五回、三月十五日午後二時、同席古川さん、本田君、例えば工学部の二号館ですとか、大講堂、列品室、そういう関係のお話は具体的に出ていましたが、あと大きなものとして私たちが考えるのはやはり図書館でございますね。

内田 工学部の二号館が大変安くできたということは話しましたね。

村松 で列品室ができたという……。

内田 そうするといま博物館のことが懸案になっているというお話だから、それ……。

村松 図書館でございます。総合図書館……。  
——博物館ができなかったお話はできておりますから。

内田 いやいままできている上野の博物館（東京帝室博物館本館、現東京国立博物館、昭和十二年、渡辺仁）のだけでも、それはもう少しあとでも……。

村松 外部の建物のことですから。あと東大内といえますとやはり図書館だとか、全体の計画のお話……。

内田 全体の配置のことは突き当たりに大講堂を置いて、そしてその左右に、右側のほうに図書館、左側のほうに博物館を建てて、そしてそれを軸にしていろいろの学部を配置してゆこうと、そういうようなことはお話ししたんじゃないかな。

——ええ、中心的なことはお聞きしました。

内田 そうすれば配置のことについては大体それで済んでいるわ

けですな。

村松 ただもつと先生広い、前に私が伺いました、例えば造園計画のようなこととか、それに関する予算の立て方の先生のプリンシプルは断片的には伺っておりますけど、何かキャンパス全体の構想のようなものですか。

内田 農学部の移転問題というようなことは、まだお話ししなかつたですか。

村松 いや一高との合併の話と、それから学園都市の農学部の本田（清六）先生、那須（皓）先生のご意見があつたというようなことも……。

内田 そういうようなことも話しましたか。大講堂と安田家との関係はお話ししましたね。

——切手まで出て安田講堂という名前が載つたんで、先生にお届けになつたらお礼の手紙がここへ尋ねてこられたということをお聞きしました。

内田 ロックフェラーが東大に図書館を寄付するといったような意味の話が、おぼろげながら震災があつてから、あまり遠くない時期からそういう話が始まっていたのですが、具体化するのはやつぱり数年あとになって、大講堂ができちゃつてからということになつたんですが、このことについても、やはりその当時の大学の中央部の人たちの中に、外国から補助を受けるといふようなことでなくても、日本で自らやつたら、それでやれるだけでいいじゃないかといふような意見もあつて、そういうような調和をとるためなどに相当

長いこと掛かったんですね。それでいよいよ始まるうというような時期に丁度大講堂が終わって、ほくのほうの大講堂をやっていたスタッフの手も空いたりしたもんですから、それで引き続いて図書館もやってほしいというんで、やはりあまり拘束を受けないでやれるということなら引き受けてもいいということで、スタッフも丁度あったものですから、それで引き受けることになったんですが、その大学に援助したいというロックフェラーの手紙をほくもその当時見せてもらって、いま詳しいことは忘れましたが非常に丁寧なその手紙のことはお話ししましたかしら。

村松 いやまだ伺っていません。

内田 丁重きわめたものでして、あれはやっぱり当時館長姉崎（正治）さん、山田三良さんが法学部長だったかな。それから高柳さんが姉崎さんの次に図書館長になったんじゃないかな。高柳賢三というんだっただか、もし間違えるといけませんから調べて下さい。多分その三人の方が主として向こうへ行ったりして、そしてロックフェラーの方面の人と直接交渉したのはその高柳君であったような気がしますがね。しかし山田先生にしても、姉崎先生にしても非常に慎重な人だから、どうもこちらの思うとおりのような、手紙を添えてそれで金を寄付したり、その細かい点は忘れませんが、趣旨は世界にもまれに見るような大震災大災におそわれて復興を要するような状態になったことは、はなはだ遺憾であると、それで自分は日本の国が独自の力で東大の図書館を立派に復興するということとは少しも疑われないが、もしもその中に自分のポケットマネー

の一部を加えることを許されるならば非常に光栄であり、かつありがたいと、そういう……。

村松 そういうポケットマネーという言葉を使っておられた……。

内田 それでつまりアメリカのロックフェラー財団が正式に寄付するということに、まったくロックフェラー一世の、つまり自分個人の問題として寄付するという言葉ではなしに……。

村松 貧者の一灯を加えさせて下さいというような謙遜した申し出なんです。

内田 力を加えさせてもらえば大変ありがたいと、そういうのでしたよ。だからそれを見てみんなは非常に気持ちが和らぎましたね。決して威張って寄付するんでもなし、それからロックフェラーにはああいうものに寄付する財団ができていまして、それが衛生を主としているようにだけでもいろいろな文化的の方面に寄付していた、それは公式のもんなんですけれどね。それで図書館が済んだあとで、これは大学直接のものではなかったけれども、まあ大学のものといっているわけですけど、厚生省主管の公衆衛生院（現国立保健医療学院、昭和十五年）、それをやっぱりロックフェラー、これは三百万円だったかと思いますが寄付することになって、これのほうはポケットマネーじゃなくて、そのロックフェラー財団が正式に寄付すると。これはまあ大学でなしにあんまりやかましい人がいないところであるからすらすらと行ったんじゃないかと思いますが。この方面は長与（又郎）さんが当時総長であって、それから宮川（米

次)さんが伝研(東京帝国大学伝染病研究所)の所長で、宮川さんが中心でいろいろやられたようですね。で実際の交渉は、これはいまでは結核専門の研究者になっている野辺地(慶三)という人が主として、その前の高柳君が世話したのとは違って、ただやっぱり主として宮川君の意見を伝え、向こうの意見を聞いてきた、といったようなことだったろうと思いますが、それはまああつとこのちの話ですが。図書館はそれでやるということになって、こちらのほうも、もう絶対に信頼している。その金の使い方についてはいちいち個々にというようなことになしに、まとめている場合にはある程度の金を差し上げておいてもいいというようなことでした。それで古在(由直)さんが向こうでそんなに信頼していてくれるなら、なおこちらは慎重にやらなくちゃいけないということで、図書館建築委員会というものを作りまして、それで前の大講堂の時もやはりそういうものができて、その時の委員会の委員長は大講堂の時古在さんが委員長で、図書館の時もやっぱり総長が委員長になって、それで建築のほうは建築部というのは大講堂の場合には、塚本(靖)先生が部長で、それでほくはその下の工務課長とでもいうんですが、名前もはつきり忘れましたが、つまり塚本さんが設計、施工のほうの総大将でその下にいたわけなんだが、図書館の場合にはほくが設計部長になりました、で委員は図書館関係のいまの山田先生、姉崎先生、高柳君のような人が入ってきたのは当然ですが、そのほかにこの寄付金にも関係ないでアメリカに信用のある人は誰だろうと非常に捜して、それで結局塚磨さんにして、そして団さんに委員

に加わってもらって、金の収支のことについては特に委員会、団さんの承認を得てやるというような方法で、何も形はそういうふうに作ったわけではないけども、実際運用をそういうふうにすることにしておいて行ったんですが、その当時の三百万円というのはやっぱり相当のものでしたね。

村松 ロックフェラーの寄付が三百万円だったわけですか。

内田 そうなんです。それでそれをどういうふうに使おうかということについてもいろいろあつたが、つまり一部を寄付というんだから、けれども事実国でやるとするということと非常に遅れるものから、一応図書館として働けるようなものにして、それでそれにいろいろ継ぎ足しをして、できるだけ完全なものにしようということにしたんですが、やっぱり大きなことを言ってもなかなか貧乏国だからそう金も出てこないんで、それで結局半分までできていないんですが、一つのブロックの、いまはブロック完備しちゃったけども、しかし全体の四割くらいはできていたですか。

そのあとへ一番主なものとしては書庫がとてつもなく不足だから書庫をどっさり作るということ。それから進歩した図書館には研究室がどっさりあつて、それでそこに外国から日本にきて、日本の大学の本を調べたいというような人も種々あつたから、そういう人のための研究室を相当数多く、でこれは一部は作りましたけど、しかしなお将来余裕があればそういうものも継ぎ足してゆく。一番主なものとは書庫の増築ということで、それについての計画を実際具体的に図面に引いて作ったわけじゃないんですけど、丁度図書館がこ

ういうふうにごうあって、そしてこの真ん中のところあたりまで書庫が出ているんです。これをその当時建っていない、いまは何か建っちゃったかも知れないが、こっちのほうまで相当大きくして、ここのところだけ、書庫の部分だけを非常にせいを高くして、そして十分な図書を採用できるようなものにとしようと、そういうことであるんですが。まあ一応はそのロックフェラーの寄付だけでもって図書館の機能を弁ずるようによいとということとで執達したわけで、そういうことはロックフェラーのほうにどういふふうに通じてあるのかそこらはよくはわかりませんが、向こうには恐らくやりくりして主体は国でやるようにするというようなことぐらひは話としては言つて。書類は公開しちやいないでしようから、そういうふうに行っているんだらうと思うんですが、それでまずその予算の組み方、いまはもう細かいことは宙に覚えていませんし、覚えていてもあんまり重要なことでもないんだから、やつぱりあとで足らなくなるといふようなことになると非常に困るから、十分な予備費のようなものを取つておきたいと。しかし初めから予算に予備費を取つておくというようなことではちよつと委員会を通すのもあれですし、ロックフェラーのほうの感じもどうかというふうな気がしたものですから、やつぱりみんな方々に割り振つて単価をいくらかゆとりのあるようなものにして、一番やつぱり本体でないところを力を入れたのは環境の施設ですね。建物としては図書館の左右に設けたパビリオンが二つありますね（西側のみ現存）。あれを……。

村松 ございますね。あれは図書館の予算なんですね。

内田 そうなんです。であれば大学全体の水道の計画、暗渠の下水道を作るといふようなことお話ししませんでしたね。

村松 ええ、まだ伺つておりません。

内田 それを一つ覚えておいて下さい、これは少し重要なことだから。そういうような関係で非常の場合には外の水道に依存しないで、大学だけで十分水の供給ができるようにすることにして、図書館は丁度ロックフェラーの寄付金で相当のものもできるんだからそういう施設をやらうと。そうするとこれをやるについてはいい水がどうしても必要なんで井戸をいくつか掘つて、それをポンプで上げてベンチレーションをやるためにその空気を洗つて循環させることと、それから貯水槽のようなものを作つて、そこへある程度のもを貯えといて、大事でも起こつたような場合には水道が止まってもその水が使えるようなふうによい、ということの計画を持つていたんですよ。

それでそれに大いに利用しようということで、森川町寄りのほうにあるパビリオン（現存）の奥のところには井戸を掘つたかと思ひますが、それから図書館の正面に向かつて左側のほうだから東、北ですか、その隅のところに相当大きな井戸がある。そこからポンプで引き上げて、地下室の水槽に貯めて、それで空気を洗うというふうな装置にしたんですが。その当時だつて少し考えれば現在やっているような空気を水で洗つて、そしてその水を循環さしていく度も使うというふうなことも考えつくんだつたけれども、そういうものはあの図書館のできる時分にはまだなかつたんですよ。洗えば洗

った水は捨てちまうというのが普通だったんですね。その捨てる水の利用法を先に考えが頭を走っちゃったものだから、それに費用も相当あるというので、その吸い上げた水を池に落とそう。それでそれを滝にしようというんで滝を作ったわけなんです。だからやっぱり多少無理でもあまり無駄なことをしているんじゃないという説明がつくんでなければどうも困るものだから、図書館の竣工式の時はむろんだし、開始してから当分の間はメカニカルベンチレーションをやった時期もありますし、そうでない時でもお客様があつたり、何か式をやったりするような場合には、その滝が出るようにやっていたんですが、そのうちやっぱり費用が掛かるもんだから、だんだんやめるということになってやめちゃったんですが。それからあのプランについては別段にどうこうということはありませんけれども、普通のものとしては少しもったいないようにできているのは、正面入ったところのホールが非常にゆつたりしていて、はしご段（階段）が非常に堂々として、あれは多少無駄な意味はあるけれども、やっぱり気風というような一種の記念性を持っているものだから、これがロックフェラーが寄付したんだと説明する場合にも相当堂々たるものであることがいだろうということ、あれは本当をいえば、単価でいってもほかのところより非常に高くなるんだし、そんなことをしないでほかのほうに金を使えばいいというような議論も出るかも知れないけども、そんなふうな意味であればやめた。

そして普通の図書館のように一般閲覧室、新聞雑誌閲覧室とか、小さな中小の閲覧室とかいうもののほかに、さつきちよつと申しま

した外国に限ったことはないんですか、主として考えたのは外国人がきて日本の図書館、そういう人が大分あつて場所がなくて困っていたものですかね。そういうものを作ろうと行って、池のほうの側のところに、これは数は多くないんですが、少しですがそういうものを作ったんです、研究室を。

村松 その当時はそういう外国人がきて勉強する施設というのはあまりなかったんでしょね。いまは国際文化会館だとかいう施設がありますけれども。

内田 パビリオンを作ったことに対しては図書館長であつた姉崎先生から、そういう金があるならもっと実質的な方面に使つてもらいたいというような、抗議というほどでもないが抗議的な意見が出たんですよ。

村松 前の広場のところの噴水もそうですか。

内田 ええ、あれもむろん図書館の敷地整備費の中から……。

村松 石畳を敷きまして、あの話を小野先生にちよつと聞いたら、ぼくが引かされたんだけど、コンパスで書くとかカーブが合わなくなつて、音を立てて先生にどうしますかと言つたら、目分量でやつておけばあとは石屋がやってくれるからと、（笑）それから右の下にはコンクリートが打つてあるんですか、何かそんな話を聞きました。

内田 これは少しせいたくな図書館だけに関係ないんで、大学全体ですけれども……。

村松 そういうシステムで……。

内田 ええ。あの石のあるところは主として車が通るところですね。すべったりなんかしないように。それから少しでも坂道のあるようなところにはあれを、丁度図書館のできる時分に東京市の舗装に坂にはああい御影の小さなブロックを使うという。でその下へコンクリートを打ったのはやっぱり丈夫にするため、損傷を少なくするためにやったんで、あれは土木の道路のことをやっていて先生には非常に誉められましたよ。やっぱりあんまりよく知らない人がやったほうが思い切ったことができていいだろう。(笑)

村松 小野薫先生がそれで設計しろと言われて、万丈何とかの計算なんてむずかしいことをやり出して、どうもわからなくて先生に聞いて、そうしたら、先生そういうようないま小野先生のお話にも出てきましたけど、図書館で先生の下で作業された方々のお名前だとか、どういうことをやってもらったとか、そういうお話をちょっとお聞かせいただけませんか。あれは岸田(日出刀)先生もタッチされておられた・・・。

内田 前の噴水の九輪があまりまじよ中央に、あれは岸田君がデザインした。あれはどういうものにしてしようというんで少し思い切って日本風のをやったらどうかとって、日本風のものにはいろいろなものもあるけど、あんまりそれに執着するといけなないけれども、五重塔の九輪のところなどはいい参考物になるんじゃないかと言ったら、それじゃそれでやりましょうかという話で、現代ある九輪はどこがいいだろうということで研究したんですが、結局僕は薬師寺だったか、そうでなかったかな、何かもう一つの参考になるんじ

やないかというようなことを聞いて、しかしあんまりそれにこだわると水煙の真似をしたということになっちゃうといけなないからということ、それでそのものを写したんじゃないかと、二、三参考にして岸田君が図を引いたんです。

村松 それから野田俊彦さんがあの時の建築の・・・。

内田 そうです建築部長、建築部というものを設けまして、野田君を建築部長にしたんですが、これは変な誤解を招いた人に迷惑を掛けたりしたこともあったんですが、これはこの時にいうべきことではないのですが、ちょっとおもしろいことだからお話ししましょうか。それは書物には載せないことにして。(笑)野田君という人は非常に有能な人で、何をやらせてもできるので、そして早くもあるしするんで、ああいいう人を遊ばせておくのは損だと思っから、次にいろんなことを一緒にやってもらったんですが、だからほかのやった仕事で野田君の助力を得たものはずい分あります。そのうちでもことに済南の領事館(大正七年)が、それで図書館の名前は東京帝国大学図書館建築部長というんだから相当なものなんだけれども、技術はそんなに手伝わってもらわないだけども。野田君もそれでいいということで承諾したんですが、その当時野田君は内務省におりまして、内務省の都市計画課の建築のほうの主任の技術師であつたんです。

それで内務省のほうの建築の親方は初めから笠原(敏郎)君でして、笠原君がやっていたんですが、丁度震災で東京、横浜の復興に對しては特別な機関ができたものだから、帝都復興委員ができた

ものですから、そっちのほうへ行っちゃったんです。でその当時の都市計画局長が長岡隆一郎君で、これは野田君と非常に意気投合して、やっぱり野田君を信頼して、いかに信頼しているかということば、ぼくもちよつと驚いたんだが、その時分に東京市の経済問題などについていろいろ世間の非難などがありまして、それで内務省が東京市の経済状態をいろいろ細かく調査する必要が起こつてきた。

それでそれに連れてゆく人、むろん事務官もいるんだけど、技術家として、もし問題があるとすれば建築が一番多いだろうというようなことで、野田君を選定して、それは長岡君が都市計画局長で第二技術課長というのを野田君、第二技術課というのは建築が庭園を含んでいるものなんです、それでやっていて、その仕事で非常に野田君を信頼していたものだから、そういうところに連れて行って、何にも知らない人の仕事を審査するということはなかなか大変なことなんです、ぼくもそういうふうになったというふうなことで野田君にもよほど慎重にやらないといけないと注意をしたんですが、そんなに非常に信用があつて、その復興委員にやらなかつたんですよ長岡君が。それで内務省に残しておいて、その内務省の都市計画局というのは非常につまらないものでして、東京と横浜を取っちゃつて、あとのことの監督をするように変わっちゃつて、帝都復興委員ができたものですからね。

村松 東京、横浜が取られちゃつてるわけですね。

内田 そうです。それで非常に小さなものになつちゃつて、そのまだ小さくない局のうちに長岡君が、長岡君はじきに社会局の

長官になつたと思つたが、そのあと堀切善次郎君が引き受けて、そして局長になつたんで、そのうちにいま少し先走つてお話ししちゃつたけれども、日本全国の都市計画の仕事から東京と横浜を除いちゃまえば、大阪、京都、神戸と一固まりがあるだけで、非常に小さくなるというんで縮小すると、それでもうそれだけの仕事なら局である必要がないから課に格下げをすると、そういうことで、格下げをする手順がだんだんと進んで行つたんで、堀切君は局長であつたんだが、局長は課長になるわけにはいかんということどつつかほかに、やっぱり内務省の中の局長に横にすべつて行つたんです。

それでぼくらが見ていてむしろ非常に不愉快に思つたのは、そういう事務官はみんな元と同じような地位のところ、地方にも出るし、技術官はみんな元の位置で課長をただの技師にしちまつて、それで異議がないものと思つていたんですね、堀切君自身は。でぼくは少し憤慨して野田君にもう君やめたらどうかと言つたら、いや先生に言われなくても私はもう、課長をしていて平技師になつて勤めているのはいやだから、また何かどうにかなるでしょうから辞めさせてもらうといつて、それで辞めることになつて。野田君がぼくを信頼しているということを堀切君も知つていたものだから、堀切君から野田君が辞めるというんだけれども一体どういうわけなんだらう、辞める必要はないように思うんだが、どっかいいところでもあるのかという話で。ぼくはそうじゃないんで、いいところがあるかないかはこれから捜して、ぼくもできるだけ骨を折ろうと思うんだと、第一ここで局が課になろうというんだが、君の地位はなくなる



んだが、君は一体どこへ行くんだと、それも辞めて課長に残れるのかと聞いたんですよ。それはやっぱりそういうことはできないというから、そんなら事務官だって、技術官だって同じことで、どういふわけで技術官を差別待遇するんだ、役所でやらないならやらないでいいから、われわれで骨を折って決しているの地位より低くない地位に持つてゆくことに一生懸命やつてみるつもりだと、そういう話をしたら、そういう意味で辞めるんなら趣意はよくわかるからできるだけ待遇をよくして辞めてもらうようにしましょう。それで堀切君も非常に同情して、野田君の俸給も上げたり、それから（テープ替え）

屋根のある家を建ててみた。そして博物館の時にいろいろ疑問の問題があるようだったから、ああいうちっぽけなものならしくじつてしまったところで大したことないんだから、しくじつてもいいつもりになって差支えないから屋根のあるものを、それでも君がこれなら最前を尽くしたものを一つやつてみてくれ、そういうことなんです。

村松 そうすると博物館の実験的な意味があるわけですね。かなり計画的、時期的にダブっていたが、でも博物館のほうも屋根をかきたいというのと、東方文化学院東京研究所（現拓殖大学日本語研修センター、昭和八年）のほうのやつのがあとからきてむこう先に工事が始まる可能性があつて、そこまで実験してみようということですね。

内田 それがおかしなことに、さつきから途中まで行っちゃああ

れしているが、京都の武田（吾一）さんのやるほうはスパニッシュルネッサンス（現京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター、昭和五年）、それで京都のほうのかなり頑強な歴史学者もいるんですが、そういう人たちがなまじつ日本風のものを作つてみても、京都のようなどころでは昔ある家よりはいいものどころではない。それに対抗しようようなものではできないに決まっている。はじめからあきらめて、向こうのものでやつたほうがいいということ、それでもつて進行して向こうのはできちゃった。こっちはそういうわけでぜひ屋根のあるのをやれということで、ほくもそういうのを研究してみると本来鉄筋コンクリートというのは壁で作る場合もあるし、梁と柱で作る場合もあるし、構造的にみるとそのどちらにしても日本の木造建築と同じなんです。壁だけで作るものもあつたり、柱と梁でもつて作るものもあつたりするというのはほかの構造ではちよつとないですね。

村松 そうですね、自由度が非常に……。

内田 だから鉄筋コンクリートでもつて木造と同じような形のものがわざわざ真似て作ったならおかしいけど、そうでなく自然にできるならちよつとも差支えない。そういう考えは昔から持っていたわけですね。だから、よくあれをにせの構造だ、シャムコンストラクションだといつて悪くいう人もあつたけど、ほくはそういう時分いつも反対で、それもやりようによるので、屋根は陸屋根でやるより金が掛かるのは決まっているけれども、しかし建築物は感情によつて左右される芸術なんだから、格好よくするために何かやると

いうことは、程度を越えなければ決して悪いことではないという意見を持っていた。

それで軒の出が非常に問題になるのですが、それをどう考えてやったら明るくするとなると、どうも軒を浅くしなくちゃあならん。壁に近いところに明かりを取るような方法がうまくい具合にできれば、ということも考えていたんですが、ところがそれとはまた逆に丁度そのその時分には平山（嵩）君が大学にきてそういう研究を始めている時期であったので、平山君は少し別に窓前の明るさを仮定すると、それが決まればそれによって窓に面している部屋の中のどここの場所でも光で計算できる、照度いくらになる、ということの計算ができるというセオリーと、実際の実験式を考え出したわけですから、それをぼくらは見ていたものだから、これは非常におもしろいことだ。それで平山君にそういう屋根の問題で苦しんでいるという話をしまして、一つは深い屋根ができたならばその部屋の下の窓の前どころではどの程度の明るさになるものか。その程度の明るさが決まれば部屋の中は、君の理論によって計算で出てくるのだからどのくらいになるかはすぐわかる。それが果して普通の事務をとったり、勉強したりするのに差し支えがあるか、ないかをよく調べてくれ。それでいろいろやってもらって平山君も熱心に研究してくれたのです。ところが窓の前の明るさといった場合の時はその時は気が付かなかったが、それによって家の中の明るさを出してくると、決して軒がほとんど出ていないようなものに比較して劣るものでないということがわかってきたのです。

それはぼくも非常に不思議に思うからなぜそういうことになるのか。算式でどういうところの数がどうなるから、そういうふうになるのかということ、根ほり、葉ほり平山君に聞いてみたのです。そうしたらぼくらが意外に思ったのは、遠くのほうに及ぼす明るさは必ずしも日光の直射光線というものではなくて、そうではなしにもっとユニフォームな自然天空光というか、つまり雲が掛かっているほうは、その場所の明るさとなると問題は違うけれど、そこから家の中に及ぼす明るさなどにゆくと、それが一番大きな原因だということ、それをだんだん説明を聞いていくうちにわかって、これは大変な思い違いをしていた、設計上から今度の場合でいえば非常に具合のいいことが出てきた。そうなってくると今度は風通しどうだとか、湿気の問題は何としてでも、人工的にもいろいろ明るさの問題よりできる問題で、だからこれで腹を据えやってみようという気になって、その話を滝さんしたら、滝さんも自分の意見通りで大賛成です。それでそういうふうの実験をやったのです。そしてできたら実際それで、あとでいろいろ理屈を付けたことだが、勉強するところでものを見るところは直射光はよくないので、間接で陰の明るさのほうが非常にいいわけです。だから書斎は北側に作るのが向きとしては理想的だということもあるのです。なるほどそうかというところがだんだんわかってきたのです。できたら実際に具合がよかったので、それから湿気のほうは初めのうちにはあっても年月が経てば湿気がだんだん薄らいでゆくのは当然の話で、風のほうは庇がこういうふうに出ていると、そこに吹きだまりができて家の中

に柔らかい風がどっさり入る。それを使ってちつとも不都合でないばかりか、かえって具合がいいという結果も出てきたので、それで大体屋根のあるものにして、屋根を付けるということはそういうことを研究している途中に決まったのか、あるいは進行している時に決まったのか、そこらははっきり覚えませんが、ともかく東方文化学院東京研究所の実験がものをいって、あそこは屋根のあるものを作るということになった。

ぼくはいまのそういう理由から屋根の裏はできるだけ明るくするということは絶対必要です。できるなら白塗がいいが、真白にもできないだろうが、なるべく明るくする。それから軒の出はむしろなるべく大きいほうが、よけい出るほうがいいということになって、そういう宮内庁に委員会ができてわれわれ委員としてぜひ発言権を持ったが、実際に施工したのは宮内庁の内匠寮ですから、内匠寮の人たちは相当強い意見を持っておりまして、われわれの意見とは少し違うので、あまり軒の出を高くするのは具合が悪いだろうという考えを持っている。ぼくらの考えていたのより比較的小さい。きっと思い切って出したほうがいい。それで屋根を付ける建物も自信を持ってきまして大学の柔剣道場（昭和十三年）、弓道場（昭和十年）、弓道場を先に作ったが暗くて困るとか、暑くて困るとかという非難はほかの建物と比較して著しくあるというのは聞かない。ぼくとしてもああいう屋根のあるデザインをやるようになった根拠であるわけです。

村松 かなり歴史があるわけですね。

内田 うっかりしてひよっと決めて大失敗するといかんから。それから天理の建物（天理学園、昭和七年）もそこからきているので、あれは（？）さんがどういいう外観のものにしたらいだろうか。配置は規則正しいものでなければならぬということ、ぼくは初めにご相談を受けたものとは敷地が変わったものですから、いまの建物とは少し違うのです。初めに作った建物はまだあるのですね。

——まだあります。

内田 （？）さんからどういいうものにしたらいだろう。ぼくは配置を整えることが第一で、ゆきあたりばったり大学がいるから大学をここに建てる、小学校がいるから小学校をここに建てるというのではなしに、系統立って配置を決めることがぜひ必要で、配置が整ってできたもの。その配置に合うようにそこに当てはめてゆく。建物は中に建てるのだから、費用は少しよけいにかかるができれば屋根のある瓦葺建物がいいのじゃないか。それからいまの東方文化学院のような実験の話などをいろいろしたのでありますが、だけど（？）さんというのは慎重な人でいろいろ研究をするので、結局似たような家の方々で見たいといつて、あれは京都、大阪方面はいろいろ見られたのだらうと思うのですが、東京にきて東方文化学院をぼくが案内して見せたのです。こういうのがいいというので、あれは気にいつてそれで高等学校を建ててというのですが、だから別段大して違うわけでないし、あのままのプランでいいような気がしたものですから、建物は東方文化学院よりはずっと大きい。そして土地が傾斜していて、高さがあるところによって違法ともあって、そういうところ

るだけ直して、つまり（東方文化学院）東京研究所の三割か、四割大きいようなものを作ったのです。やはり少し大きくしてみると、二度目であったからかも知れないが、これもぼくが自分で図を引いたのですが、エレベなど。東方文化学院もそうですが、天理の高等学校のほうが東方文化学院よりは形がいいような気がする。二度目だから、スケールの違いとやはり屋根などああいふものをやるには少し下がどっしりしているものの方がいいのかも知れないという気がします。

——東方文化は二階で、天理は三階ですから。

内田 前は二階です。それができてしばらく経ってから今度は敷地が大々的に拡大されたので、前の配置じゃあ具合が悪くなって、あれは今度のにぶつからないのですかね。

——外になるのです。

村松 何にぶつかるとですか。

——（？）というすごいスケールのその外になるのです。その一部に大学の校舎ができております。

村松 エレベーションをお書きになったといいますが、屋根の軒のカーブなどは研究されましたか。

内田 これは感じの問題で、ずい分雲形状でなく造船で使うような大きなカーブ、あれを使って書くとうまい具合にゆきますね。それが変わってくるから、その使い方などもいろいろコツがありますよ。

村松 古い建物のカーブの線のある程度解析して線を出されたの

か、先生の感じでこのカーブがよろしいという形で……。

内田 感じですね。独自のものをやってみて具合が悪いという、つねづねいいカーブだと思っているものの図面と照らし合わせてみて直すということです。

——二〇分の一のカーブをちゃんと書くなどーって（？）

村松 最近の日本建築史の研究がかなり数量的な実測図面に基いて（？）と柱までの比例関係とかをずい分統計的に研究するようになったのですが、ただ先ほど伺って軒の出の問題と桁の部分の高さの関係とか、カーブの統計的な解析があまりされていないですね。

内田 あなた方ご専門だけれども、ぼくはそういう点だと一種の意見を持っているのです。うっかりしていると木割を作ることになります。ぼくは千差万別だと思えます。形がいいといっても、そのいい形のを違う家のところに持って行ってくっつけてみても必ずしもそうでない場合がずい分ある。どうしてあの木割ができたかという、何とかしていい形のを作ろう。これはうまくできたといってもそれを写す方法、同じものを作るならばいいが、そうでなくて少し変わったもので写す方法がないので、それでいろいろ柱間の関係とか、柱の太さということから、いろいろ割出して行っているの……。

村松 結局あれはあとから付けた理屈のような感じもしますが、どうでしょうか。いいやつができてそのパターンが当たってみたらそういうことになるから、これがいい木割だ。建物のスケールと

か、置かれる環境によって本当は一般的に通ずる法則でないですね。

内田 そうなんです。一方においてはあれは一子相伝ということがあつて、人に知らせないようにして自分の子孫にだけ伝えようとする。その子孫が自分のように頭がよければいいが、そういうわけにはいかんものだから、これがいいのだといつてもどこがいいのかわからない。だからこういうふうにしてやれば、ほほい形のものでできるといつて教えた。そういうことも重要な要素だということという人もありますが、ほくもそうだと思います。

村松 最近の建築など非常に精密で確かに近代的な日本建築史の研究だと思つたのですが、解釈の仕方をうっかりすると先生のおつしやつたような弊害が出てくるかも知れないですね。

——この間の建築学会に(?)の研究が(?)代数式で置き換える。

——東方文化の軒の出は一応先生のご設計とおりの寸法になりましたか。博物館は駄目でしょうか。

内田 ただあの中でゆきがかりがあつて渡辺(仁)君などというと、俺の設計をけがしたといつて叱られるかも知れませんが、表玄関のポーチはぼくが自分で書いたのです。あれは恐らく二〇分の一ぐらいで書いて、口で言つてもなんだからこういうふうにしてやつて下さいといつて北村君に頼んでやつてもらつた。

——玄関のほうは違います。われわれも感じています。(?)は付け足しの感じのようですが、下のほうはわれわれ見ても確かにいいと思います。

村松 日本室に屋根を付けるということで、今度竣工します新宮殿(昭和四三年)のほうは先生からそういうご意見を出されたのですか。

内田 あれはぼくらいくら意見を述べても聞かないのだからしょうがない。ぼくの意見はあれの二百分の一ぐらいの図面か、あるいはもつとちいさかつたのか、そのスケールのものを作ってそれを基礎設計にするという意味でもって皇居造営審議会という非常に大きな委員会ができて、その委員会にかけたのです。そのかけた原案を作るまではぼくがずい分関係していたし、いまカーブや細かい点は関野(克)君に頼んで、そのために関野君に委員になつてもらつたのだから。ぼくは大体どつしりしたもので、あまり小さな細工をしないほうがいい。大体唐招提寺の軒のような形の意味のものがぼくはいいと思つたのです。ああいう趣旨でやりまして、何かいまできているのはあれは美術学校の吉村(準三)君の案なのか、あるいはそうでなくてあそこに素人で部長をしているその人の意見であるのか、どつちか知りませんがぼくらは軒の出だの、軒の反りだの、屋根の反りだのというのは関知しなかつたな。関野君にもう少しやつてもらつたら、ぼくはほとんど喧嘩したような形になつてしまつたから、ただ辞めないだけです。吉村君との喧嘩が表面に現れないだけの話で、関野君などもう少し、あれは吉村君に頼んだから、吉村君の意見と関野君の意見が違つて、関野君がそれを通すことができなかつたのじゃないかという気がします。

村松 私もあまり詳しいお話を伺つておりませんが、関野先生も

関野先生なりに調整されたり、いろいろ苦勞されているのですね。

内田 関野さんはそういうことになると思務的な人で、事柄を円満にうまく結末を付けられるように、それも結構なんだが吉村君など芸術家精神だが、つまらんことだと思ふのだ。デザインに関係のないようなことで意見が衝突して協力しないという、ぼくはそこまではゆかなかつたがあまり……。

村松 上野の博物館に話を戻させていただきますが、そういう屋根を付けるということは、東方文化学院で実験されて付けるということで懸賞募集要項が発表されたわけですか。その前後関係ですが。

内田 すっかりこつちが確実にいいと決まってあのコンペティションの条件が出たか、あるいは実験の程度が進みつつある間に、これならたいていいいからこれでゆこうとしたのか、それをちよつとはつきり言いかねるのです。

村松 それは文化学院の竣工などとコンペの募集要項の発表されたのを時間的に突き合わせてみれば見当がつかますね。

内田 もっとも竣工して実際に使う前にもそういう実験的な意味でこさえているのだから、種々そういう意味のことは注意して調べてありましたから、しかし大きな問題としては、あれも滝さんのようなああいふ大胆な、しくじって駄目にしてもやってくれというような意見の人があつたからできたのですよ。京都の方面では武田さんが屋根のあるのを神秘だの……。

村松 図書館、東方文化研究所、上野の図書館のお話を伺つたの

ですが、きょうこれに引き続いて……。

内田 さっきの浜田さんのことで忘れないうちに、ぼくが大学のエキスカーションに行った場合に伊東（忠太）先生のご指導を受けたということ、この前申しましたね。あの時は学生のほかに、ほかの人も一緒に同行したのです。その一人が浜田耕作君で、もう一人は朝河貫一といったエール大学の東洋美術（注…歴史学）の先生だとぼくは記憶しているが、いまはどうか。これも間違ふといけなから、それが丁度日本の建築を伊東先生が学生と一緒にゆけるといふのを知つて、それに一緒に同行されたのです。ほかに二人ほどまだあつたが、それは忘れましたね。それでぼくらはああいふ外国語をしゃべつたりすることはほとんどできないから、直接話ができたらおもしろかつたろうと思ふが、そうでなくて間接的にいろいろ聞いたりなどはしたが、これも忘れたようなものだが有益なことだつた。朝河君はそんなに偉い人だとは思わなかつたが。

村松 当時浜田先生はどういう資格……。

内田 大学院の学生か、何かじゃないかと思ふ。京都（大学）では総長になつたのじゃないのですかね。

村松 先生よりちよつとお年が上ですね。

内田 上です。それはちよつと付けたりみたいだが、ずい分歩かされて、方々歩くのでくたびれたある日宿に着いて寝る前に「先生今日はずい分歩いてくたびれましたが、明日はどのくらい歩くのでしょうか」ということをお聞きしたのですよ。そうしたら先生が「君ちよつとノートを出したまえ」というのでノートを出すと、そ

ここにスラスラと図を書いて「明日はここからこう行って、こう行って、それでこう帰ってくる。そんな程度でかなりあるからくたびれるよ」というお話だったのです。それで「先生、それは何里ぐらいいあるのですか」と聞いたのです。その先生の答えに驚いたのですが、そこに書いた図は二〇万分の一といわれたかはつきりしませんが、「ほぼスケールが合っているから、物差しがあるから計ってみましたえ」という。先生大したことというが本当だろうかと思つて、その時は大勢で話したりしていたから、そのままにして東京に帰つて、それで参謀本部の地図と引き合わせてみて、ほとんど違わないのですね。それでぼくは伊東先生というのは大したものだと思つて、その時の東大の地理の先生が山崎直方という人です。山崎直方さんに「ぼくは伊東先生についてこういう話を聞いて実に驚いているが、そういうことをいうのは大変失礼だが、先生は地図など詳しく知つておいででしょうね」と言つたのです。そしたら「とても駄目だ、地図についてはぼくは伊東君に及ばん。伊東君の地図というのは大したもの、きつとあれだけ地図を知っている人はないだろう。」そういう話で、それからぼくはその話を伊東先生のところに持つて行つて「山崎さんからこういう話を聞いたが、先生は一体どうしてあの地図を覚えられるのですか」と言つたら「さあそういうわけでも困るけれども、汽車に乗れば周囲をグルグル見ているし自然と地理が頭の中に入ってくるね。」という話でしたよ。だから一種特別な地図に対する頭を持つておられるのですね。実際驚きましたね。物差しあてて計つてみたのですがね。

——われわれの講義の時でも、カーブのバランスが実にうまいのです。スケッチがうまくて写真に撮つたらいいというのがありました。そういう先生に教わっているから先生もお上手になったのだろうと思つて……。

村松 いまはそういうことはなくなつたですね。時代が変わつたのでしようね。

——屋根のある建築については……。

内田 そこに持つて行つて屋根を付けるのについて割合大胆になつて、それで東大の中の柔剣道場と、弓道場、ああいう純日本風のものだったら感じがいいと思つてした。しかし、あれは柔剣道場などについてはあんなにまで日本風にしてくれなくてもよかつたという当事者のある人の考えもありますね。

村松 バラエティーがあつていいのかも知れないですね。

内田 お世辞か何か知らんが、多くの人はああいうふうになると中に入つて気分が違ふといいますがね。

——いまの九段の武道館（日本武道館、昭和三九年）などわれわれしつくりしないうすね。

内田 傑作じゃないですね。山田（守）君は晩年の作は具合が悪い。京都のタワー（京都タワービル、昭和三九年）だつて実に変なものだな。

——やられる時に垂木など省略されたのは必要ないという意味からでしょうが。

内田 垂木を付けるのは意味ないね。

——肘木とかやっておられました。(?)の形が出たと思いますが、天理など。いわゆる日本建築の木造のディテールを省かれたのは、別に必要もないからでございませうね。どうせ形的なところが感じがぐつと出るからあの分だけ出たような形に残ったと思うのです。(?)形の上でもあれは全然なかつたら寄席風の建物の変な感じがしたのですが。

村松 病院の建物などでお話があるのじゃないかと思うのですが。

——脱衣室の建物についてもお話があるように伺っていましたが、それから最後に接収の問題をお出しになるかと思いますが。

内田 それから運動場……。

——運動場とその脇の脱衣室になると丁度よいですね。

内田 この朝河という人は相当有名な人らしい。ぼくは知らなかったが、何年か経ってからつい数年前ぐらいかな。新聞に相当長く出ていたのがありました。もう亡くなったと思います。アメリカの大学の先生です。

村松 いま私「アメリカの芸術に及ぼした日本の影響」というラシキヤスターという人の書いた本を読んでいるのですが、その中にあるかも知れない。

——専攻はどういうところですか。

内田 東洋美術史ですね。日本流にいうから東洋美術史だが、向こうでは何というか……。

——プールは何もございせんか。

内田 プールと運動場を一緒に入れておきましょう。こういうのだと何か昔の罪悪を白状するようなことになって、内田はけしからんといわれるかも知れん。

——もう時効ですから。

内田 プールはあれで刺激されたのです。日本の水泳で一番最初にオリンピックに行つたいまは七〇歳くらいの人じゃないですか。これがオリンピックにゆくので練習をしたいけれども寒くて冬の練習はできないのです。それでいろいろ方々捜した結果、工学部の機械教室の側に貯水池があるのです。あそこに蒸気が吹くのです。それをこっそり使ったのか、公に使ったのか知らんが練習して向こうに行つて何とかのメダルを取つたのです。あれは長さが二五メートルもない二〇メートルくらいじゃないかと思うのです。それでともかく完全な規定に合うようなやつを作つてということになつて……。

——われわれのクラス会でもよくあのプールで泳いだという話が出るのです。

内田 あれは完全なのだが、やはり相当(テープ替え)

村松 あれはベルリンオリンピックですから昭和十一年ですか。

内田 あれよりもっと前ですね。東大の食堂の下のプールができる前にどこかあいうプールが、九段の青年会館(YMCA)かにありましたね。野球場の長与さんが部長というわけでなく部長より上だろうが「なぜ東大は弱いだろう」といって「学校の関係があるから」というと、「学校の関係があるといつてもフットボール



(蹴球)などは相当強い成績を残しているのだから、それは初めてのうちは強いけれどもあとになると、何しろいまは運動場がないのが弱点だ。「運動場ができれば強くなりますか」と言ったら「運動場ができれば必ず勝つ」「それじゃあ運動場を一生懸命になってこしらえるから勝つてくれますか」というと「それは勝つよ。」運動場を作ったけれども勝たない。

——博覧会のニューヨークとか、サンフランシスコ……。

内田 あれはやりました。これは(?)というほどでないですね。

村松 最初五回の予定をきょうで五回目ですが、もう何回ぐらいお話を伺ったらいいか、同潤会とか……。

内田 同潤会はそう多くない。浴風園(昭和二年)、これもぼくとしては短い。

村松 日立の話とか、天理の話も……。

内田 住宅地計画は話しましたか。

村松 災害関係とか、火事の関係。

——都市計画関係の図面は高山先生が盛んに集めておいでのようです。

内田 ぼくのところにもかなりあります。都市計画関係は一団地の大都市計画、あれは「大都市住宅の補給策について」という題で「建築雑誌」に書いてあるのですが、その次が大きなものでは大同の都市計画。

——学校の住宅地計画。

村松 あと四、五回必要になりますかね。

内田 住友、大阪北港株式会社の住宅地計画。

村松 この機会にまとまってお話を伺っておこうということで先生もお疲れでしょうが。

これで内田先生、第五回を終わります。(了)

○第六回(昭和四十三年三月二十六日)

村松 内田先生のお話第六回、三月二十六日。前回の時次回に話したかどうかという事でメモを取ってありますのは、病院とか、プールとか運動場脇の脱衣場、運動場、そういう東大関係の建物の残り。病院についてもレリーフのお話はこの間伺いました。

内田 あなたはご存じですか、三菱コンドルさんの設計したのを壊し始めたというのを。

村松 一号館(三菱一号館、明治二十七年)ですか。

内田 サンケイ新聞を見て驚いたのです。こつそりと壊しはじめた。いよいよ一丁ロンドンがなくなるといふことと、それをできれば一部を品川の岩崎邸(現三菱関東閣、明治四一年)の中に持ってゆきたいという希望もある様子だ、といふことを書いてある。写真が出ていて、写真を見ると少し下のほうを壊している。

村松 それはひどいですね。

内田 ぼくも實際壊している現場を見ないが、サンケイ新聞で見たのです。

村松 不意打ちの感なきにしもあらずですね。

内田 三井ビルだの、海上（東京海上ビルジング、大正七年、皆禰中條建築事務所）だのあって、やらなきゃ損だといったような気持ちも出てきたのでしょうかね。

村松 三菱ともあろうものが。

内田 ぼくは渡辺君に、「あれは残すとぼくらが主張しているのは国の建物の、都市計画の歴史の方面からぜひあれは残したい」ということを言っているが、三菱の立場からいっても、ぜひあれは残さなければならぬのです。明治二十七年にあれのできた当時はあの建物の半分に三菱合資会社が入っていたにすぎなかった。それがともかく現在のようになくなって三菱としてもぜひあれは大事じゃないか、と言ったら「そういう統合力は全部破れたから」と言っていました。あれを品川のところでクラブに使って三菱系のものはあそこでまとめようというらしい。写真を切り抜いています。

村松 足場を組んでいるようですね。

内田 こっそりやっている。

村松 かなり前から意思表示はしていますが、ただ文化財になかなか指定できないのですね。しかし今度は日銀の本店（日本銀行本店、明治二十九年、辰野金吾設計、昭和四九年指定）は指定するといふ話を聞いています。

内田 あれは日銀が承諾すればなるのですが、承諾のないものを無理にやるのは。ただ政府がああいうものを受け入れするのにも、ものにもよるだろうが莫大な費用を出す。平城京などは十億を超えると思うのですが。そういう金を一度でなく出すようにしているか

ら、だから長い間には買えるでしょうが。しかし国のものなの、日本銀行だの、三菱というものに金を出すことは難しいでしょうね。

関野さんは帝国ホテルのに伴って三菱の一号館は大事なものだ、ということをおっしゃられたが、でも帝国ホテルは大きく取り上げられて、いまの一号館はその影にかすれてしまったようになったが、やはりジャーナリストがある事柄を扱うとああいうことになるのはやむを得ないだろうと思いますね。

村松 評価の問題ですと、例えばライトの作品ということとコンドルさんでは、ライトほどに世界的に有名でないということと、それから日本人の悪いくせで古いのは恥ずかしいのだというのがあるのです。一号館などでもよくお話をしますと「あんなのはロンドンや、パリなどでいっぱいあるじゃないか。何をそんなに大東京に一つばかりあるのを大騒ぎして大事だ、大事だといっているのか。そんなのは外国人に見せたら恥ずかしいぞ」というわけで、これはしかし先祖の書いた証文みたいなので、やはりそういうところを辿って今日の日本の建築界ができたのだから、やはり恥ずかしくても何でも先祖がこういうことをやってこまできたのだ、という証拠だ……。

内田 いまの若い人があまりコンドルという人のことを知らないのです。

—あれは悪い建物でないと思うのです。ロンドンにあっても負けないと思いますね。

内田 いかにも歴史的な価値が大きいからといって現実的な価値の

ないものを否定するということはどうもおもしろくない。ところがそういうのがかなりあるのです。歴史的なことは尊重される力が大きいのです。それでぼくはあれもデザインの評価が少ないものじゃないだろうかということで、これは関野さんに頼んで向こうの様子などをいろいろ調べてもらったら、やはりデザインとしては立派なものだ。コンドルという人は日本にきた時は二十何歳でもってきているのに、日本にきてからどんどん腕を上げて、あれはR・I・B・A（英国王立建築家協会）にいたのです。その内容はよくはよく知らないがソーンメダリオンコンペティションというのがありまして、それに入選してあれは立派なものだ。それならば歴史的に考えて、ことにぼくが多少専門的にしている都市計画の分野に非常に強いからかも知れませんが、非常に尊重すべきものだから大いに主張したのですが、あれもぼくは片山（東熊）さんの東宮御所、それから日本銀行が近頃は同じウエイトのように考えられているが、どうも歴史的な意味からいっても、デザインの点からいってもどうしても日本銀行が一段上だから、東宮御所が指定されるならば、その前に何としてでも日本銀行は指定しなければいけない。ぼくがそんなことをいっていたことが多少日本銀行の指定を遅らせているのかも知れないが、どっちかというあまり好まないらしいですね。拘束を受けるものだから。

村松 しかし最近は大分指定のための準備が始まっているようですね。日銀の方でもその気になってきたのじゃないでしょうか。元の辰野先生のやられた部分ですね。

内田 じゃあボツボツ入りますか。最初にぼくが思い付いたままに勝手なことをしゃべりますから、あなたのほうでまとめて下さい。大学の運動場の下のことですが。

村松 運動場下の脱衣場になるのですか。

内田 そうです。脱衣場といまはなくなつたのですが理髪所。あそこに運動関係、学生関係の雑物を相当入れたのです。そのうちの一つですが。

村松 いまでも入っているはずですよ。

内田 大学の中にはコンドル先生の非常に立派な建築があつて、大勢の人の目を引いていたのは誰も知つていますが、辰野先生の作品としても立派なものが残つていた。これが濃尾震災以前の設置になるものであるため大正十二年の大震災につぶれはしなかつたが、相当の損害を蒙つて使用に耐えられなくなつて建て直したのがあるのですが、その建物が工学部の第一号館と、いまいつていまます土木・建築の建物ですが、その位置にほぼ現在と同じような形になつて、中が大きな中庭があつて、いまは中庭が二つに真ん中になつていますが……。

村松 それは工科大学本館という名称ですか。

内田 自然とそういう名称になつたのだと思うのですが、工科大学本館と東京帝国大学工科大学本館、そういえばわかつたのです。そこに初めのうちは法学部の事務室、学部長室そういうのが二階にあつたのです。これはでき上がったのが明治何年だったかな。（明治二年）

村松 五十年史でわかると思います。いずれにしても濃尾震災の前です。

内田 前です。濃尾震災が二十四年ですから、明治十八年に東京帝国大学ができて、コンドルさんのやられたものができたと思いますが、それで使用に耐えなくなったので震災後に壊すことになった。実際壊しに掛かったらどうもデイトールなどにおいても純粹のゴシックではあるけれども立派なものがあるので、その一部分でも何とかして保存したいという考えを持ちまして、そこにキャピタルだの、壁の一部などきれいに取れる場所は丁寧に切り取って、それを保存しておいたのです。そしてたまたま運動場の下に学生の用途に供する建物を作ることになったものですから、丁度いい機会だったのでその一部分にそのデイトールをそのまま持つていって組み立てた。それで工学部の本館の建物というのは、大きな構想でできていたもので全体としてまともに非常にいい。それからデイトールもいいというものであってそれを切りほいしてしまつたのでは、主な値打ちはなくなるのです。しかし辰野先生がデザインされて作られたキャピタルはこれであつた。ベースはこれであつたということとは間違いなく保存されているようになってるが、そういうことをやつてコンドルさんのほうが、例えば小さい場所でも一まともにして保存できるようなのは取れない。あれは壁があつて、壁に窓をあけたようなものですから、少なくとも窓一つ分ぐらい持つてゆかないと保存はできない。それで仕方がないということになつたのです。

村松 それは初めて伺つたお話ですが、工科大学本館のあれが運動場の近くにあるのです。

内田 ありますよ。運動場の外から見たところ。角が隅切りになつていますが、あそこに一番よけいやつています。

——先生が中庭に入つてかいた水彩画のスケッチがあるのです。

内田 あなたはそういうことをご専門でしようが、ぼくは実物を見ていないからあなたはぜひ見てほしいが、ぼくはそういうことをして笠原君が震災あとで復興院の建築部長、初めは建築局長ですか。それで適當なものがあれば捨てしまわないで残したらいいじゃないかという話だったので、笠原君は俺もそういうふう思つていたのでコンドルのデザインだといいましたが、それが永大橋の側に……。

村松 開拓使物産（開拓使物産売捌所、明治十四年）。

内田 それがあつたのです。あの建物の一部分をどこかに残そうという考えているのだという話です。それを何か一部分小さく組み立てて隅田公園の中のどこかにそういうのを持つて行つて作つてあるはず。それはかなり古くなつてから笠原は生きていないから聞けばわかります。

村松 これは「建築雑誌」か何かの一部塔みたいにして使つて報告されたのですが、戦前のことですから、今度の震災でどうなつたか確かめていないのですが、あれはコンドルさんの初期のもので、から貴重なものです。

内田 辰野先生のは確かにあります。

村松 これはあそこにゆけばすぐわかりますか。

—それは古いのを真似て作られたと思ったのですが、本当の現物が残っていたら貴重なものですね。

内田 純ゴシックのキャピタルベースです。

村松 あとは三井霞ヶ関ビルの裏のところの会計検査院のところに工部大学の発祥の地があります。あれは佐野（利器）先生がデザインされたものです。あれは工部大学の講堂のレンガとキャピタルを一部使って、あれは佐野先生に大熊（喜邦）先生がかなり熱心にやられたんですね。きょうは三菱一号館からそういう話になって、先生、優れた建築家というのはただやたらにぶちこわして自分のものを作るところから自分自身もいいものがデザインされるという払っているところから自分自身もいいものがデザインされるという関心を持つのですがね。

内田 それはものにも人にもよるでしょうが、近頃のようになると、ほくら猛者の先生のディテールが入るようになったが、できることを希望し、心掛けていたからああいうことになったが、ただ普通にやっつてしまえばちよつとああいうものはできないですね。

—私たち何であんなところに装飾的なものを作ったのかと思ったのですが。

内田 あれは角のほうに柱はなかったですか。

—はめ込んであったようです。

内田 柱があればアーチもあるはずです。

村松 そういう話を伺うと昔の建築文化の花が深くなるような感

じを受けるのです。

内田 あれは自分が気に入らないからといって元の環境をぶちこわすようなことをやるというのはいかんね。現代のようにすっかり変わってくると違いますが、それが運動場のことで、もう一つは何でしたか。

村松 この間話がありました水泳の古い人が……。

内田 実験室のプールでもってやっているというのを聞いて、それなら本式のやつを作ろうということいろいろしたのです。丁度地下室のあいっているところがあつたから、ああいうものは予算を出しても通らないのです。だから従来ある地下室を使うということをやった。もう一つは何かありましたね。

—野球場のできた時の何か写真がありましたか。

村松 病院のレリーフのお話は伺ったのですが、例えばプランニングとか、（？）だとかかなり大きな建物ですからレリーフ以外のところでお話がありましたら。

内田 病院の設計につきましては、当時の病院長の塩田広重先生で、塩田さんは相当派手なことが好きな方で「東大の病院というのは相当堂々たるものにしたいたいと思つている。何か全体を一まとめにまとまるような形の案を作つて、それを少しずつでもいいからだんだんと継ぎ足してゆくという計画にやつてもらいたいと思うが、震災復旧費でそういうことはできないだろうか」という。「震災復旧費のようにまとまって予算が取れるということが非常に少ないのだから、全然滅失してしまつて使えなくなった建物が多い中に病院は

ある程度残っているのだから、そつちを先にやるということではできないが、そういうことを心掛けておきましょう」ということで塩田さんとそういう約束をしていたわけです。そのうちに東大病院の看護婦の宿舎が、これは相当大規模の大きいもので竜岡門の入ってすぐ左の少し戻ったところですが、あそこに看護婦の宿舎がありました。それが焼けたのです。これは焼けたのはいつだったかな。

村松 失火ですか。

内田 ほかからきたのではなくて宿舎だけが焼けたのです。これが面積にすれば相当大きなものです。それで塩田さんが「いま焼けて幸いにといいことでないが、ともかく焼けた災いを福に稼したい。金がないが希望しているようなものの一部分にこれを使うようにしたい。だからできるだけ自分がふんばって相当な家ができるように予算も出してもらうように骨を折るから、それで一つ病院を適當な場所に作るようにして形を実際に表してゆきたい。」そういう話がありまして、ほくもそれは結構なことだという考えから看護婦宿舎の復旧予算、あれは物療内科の先生が作られた、その先生が稲田さんと同級だと思えますが、内科をやった腕のある先生です。それで病人に対して親切で、これはどの病人にもああいうふうに関心のかどうかかわからないが、この病人はと思うとそれに大先生がほとんど徹夜して看護してやるという人です。それで大蔵官か、何かが重い病気にかかって入院した場合にそれに熱中して一生懸命に治療にあたって、とうとう治したのです。その人が感心をして、ああいう立派な先生がいるのに講座もないというのは不都合だ。だからあの

先生のために予算を大学から申し出ないのに予算が通ったのです。何とか内科とかいったが、それが大学では問題になって、大学から申し出ないのにそれを脇から言ってくるから大学はそれほど必要としないもの、つまり内科はすでに三つあるのですから、その上にもう一つ作ろうということはつじつまが合わないということではなかなか承知しない。

そこに塩田さんが入って、「丁度いいものができたからあれも一緒にして使おう。お医者さんのほうには、ほくはしかるべくうまく話をして問題を起こさないようにするから」ということで、塩田さんとは仲がよかったが、稲田さんとは同級で仲が悪かったのですが、それも一緒にしてこれは物療内科という名前で一緒に入れることにして作ったのです。外来というのは面積が広がったものですから、全体の金額は相当なものです。ですから、一部に集中的に金を使えば相当立派な場所も作り得る。それで塩田さんがそういうから少し目立つようなものにしようというので彫刻を入れた。この前彫刻のお話をしたと思いましたが、ちよつと予算では取れないからタイル張りにするというので、タイル張りに違いないが、それでタイル張りの彫刻を作ったのです。それででき上がってみれば相当立派なもので、塩田さんも大変満足してくれたのです。

だからほくの計画は、回りをあそこは西側が正面です。だから西側の中央側になるべく病人専用でないものを作って、そしてこれに直角に交わる棟のほうは南と北にするのだから、ここに病室をよけいに建てる。そしてうしろの真ん中のところにはみんなに共通のもの

のを作つて、便利な大病院の計画をやる。そういうことで端のほうからだんだんやつて行つたわけです。それで一部分できたところ  
で震災復旧は終わるし、ほくは辞めるといふことで、またあとの人がきて、塩田さんも辞めて別な人がくるといふことで、いまは大分  
違う。真ん中をホールにして・・・。

村松 大分様子が変わりましたですね。(テープ替え)

これが大学の営繕課を頑張つていたばくのデザインとしては最後のものだが、これは実現しなかつた。とても学校では講義があるし、デザインまで学校でやるということはできない。暇がないのです。そうかといつて二百分の一は自分で引かないといふと、自分の思うようなものができない。二百分の一はぜひやろうといふことで、そういうデザインは土曜はほとんどできないで、日曜日に大体出勤していました。日曜日には営繕課に行つて、営繕課でデザインする。それから現場(?)それから少しまとまったものは夏休みに避暑地に行つて、そこでデザインをやる。大きなデザインはたいい夏避暑地でもつてやつた。これもその一つで、これは強羅に避暑に行つて、そこでやつた。これは最後のものです。ほくは二百分の一を書くといふことになつたのはお話ししましたね。自分でいかに小さなスケールのものでオリジナルなものをやらないと思ふようなものがない。それから正門入つて突き当たりが大講堂で、その左右に博物館、法学部の反対が強く・・・。

——美濃部(達吉)部長さんの反対が強く・・・。

内田 それから大学としてまだ残つていふのはプールはいまのよ

うで、運動場は本郷の一高の側にしても、駒場のほうにしても相当大きなでこぼこが敷地にあるので、高いところと低いところとあるのです。これが適当にならさなければ建築敷地とするのに相応しくないで、それを適当にならすのをどういふふうにするかといふこととでいろいろ考えたのですが、もしならすのならそこに相当な規模の運動場が適当にはまるように地ならしをすれば運動場の敷地になる。そういうふうにしよと腹を決めまして、それで敷地整備費、敷地地ならし、それで運動場を作つたりといふとおかしいが、運動場はつまり地ならし工事でできたのです。だからこんなものができたといつて驚かれたが、そういうふうにはくが説明すると理屈はつくものだ、といつて大体進んでいった。そういうふうにして運動場は一つやつてみて具合がいいものだから、そういうふうにして駒場は野球場を一番初めに作つて、水泳場はどうしても例え一部でも予算を取らなければできませんから。場所を予算が付いてるので本郷のほうに野球場、普通の競技場、蹴球場は昔からの御殿下の運動場を使つて、狭くはあつたが少し往來のほうに広げて、運動場を広げて前の道も従来あつたのより広げて、従つて病院の方がそれだけ下がつたわけです。ただでさえ敷地が狭く困つていふのを狭めることでやつたわけだが、篠田さんとはよく話して、その代わりうる側で従来使えなかつたところを使えるようにするからといつて了解を得てやつたわけで、いまではあんなに立派な運動場が東京の、昔の市の敷地の中にあれだけのものを持つていふ学校はないといふぐらいにまでしました。

村松 運動場は学校の外、郊外に持ってゆきますから学校の中でああいう行事ができないですね。

内田 あれは非常に違うのです。学校の中でやるのだというと、四時まで実験をやつてそれから運動をやる。工科とか、理科とかでそれができるのです。医科などはなおそうだったので、長与さんは野球に優れた腕を持っていましたが、野球の話をよくしたので、長与さんのその当時いわれたことは「すぐ側に野球場がなければとても練習は、少なくとも医学部に関する限りはできない。だからいい選手を多く出すというわけにはいかない。」という話から「それなら校内に野球場ができたなら勝ちますか」と言ったら、「校内にできればきつと勝ってみせる。」「本当ですか」というと「それは勝てるさ」という話で、それじゃあほくも一生懸命で野球場を作りましようということで作ったが、作っても勝つというわけにはいかんだ。

村松 スポーツはかなりご理解をお持ちのようですが、先生ご自身はスポーツはいかがですか。

内田 全然やらないのです。しかしスポーツというのはいいものだということ。それからあまり見物にゆくものだから、蹴球など見物にゆく人がないので学校の先生で見にゆくのはほくだけだということ、とうとう部長にさせられた。

村松 ご覧になるのはお好きなんですね。

内田 見るのは好きです。スポーツを見ていますと、みんながスポーツは勝つためにやるのではなくて体をこしらえるためにやるの

だということですが、それはほくは嘘だと思つたのです。やはり運動をやる以上は勝つのが目的で、勝たなければ意味がない。勝つためには体をよくするのでなくて、かえつて体を悪くする恐れがある。だからスポーツの選手になつたら体を悪くしないように気を付ける必要があるということ。運動の選手は対等の力を持ち、対等の資格を持つているのが何人か二〇人か、三〇人か集まつて、ある一つの仕事をしてゆくのですが、そのために団結力が強くなる。それから自分もあまり無理をいわないで、人の気持ちもよく想像してまともができる。ことにキャプテンなどになるのはちよつと学問などではできない能力を持ちます。そういう関係で運動をするのはなかなかいいところがあると思つたものだから、無理に勧めるわけにはいかないから希望する人があれば、その代わり体格検査を時々しました。

村松 東大関係は運動施設がずい分恵まれているような感じを受けます。駒場にしても、本郷にしても、農学部にしても、これは一つの特徴かも知れないですね。あまり気が付かないことですが、ずい分考えてみれば恵まれていますね。

——現在の企業はスポーツ選手を採用しますね。学業と同時にスポーツをやる人、チーフに立つ人はまとめ役ですから、富士鉄の永野さんなど柔道マンですから柔道選手をみんな採用します。

柔道を活用するのは社名を高める意味もありますね。帝人も柔道の好きな人がおりまして相当やっています。そういうことを先生は以前からおやりになりました。



村松 剣道は私りましたが、キャプテンやったり、マネージャーをやったのですが、ずい分いい勉強になったと思います。

内田 ちょっと学校では覚えないうようなことを。

村松 ある意味で人生勉強みたいな……。

私も中学、高等学校で剣道をやっていたのです。マネージャーなどして、いまだにその時の師範と付き合っていますが、精神訓話もされましたが、同僚をまとめることを大分やらされました。先生は特に野球をお好きで……。

内田 おもしろみがありますね。

村松 ジャイアンツのファンですか。

内田 それはジャイアンツは東京ですからね。

——球場へはゆかれますか。

内田 近頃はゆかなくなりました。以前はよくゆきました。

——私は先生にプロ野球のことを教わったぐらいですから。

村松 それで今度は東大の建物を重点的にやりますが、前のリストだと地震研の建物（昭和三年）とか、工学部の総合試験所（現工学部六号館、昭和十二年）とか……。

内田 地震（研究所）が残っていますね。地震をごく簡単に言っておきましょう。地震研究所というのは震災後にできたものでして、地震に関係して大森（房吉）先生の話をしなかったですね。病気で帰ってきてそのために大森さんの説を山本（権兵衛）総理大臣に取り次いで、じゃあそのことをお話ししましょう。

まず建物のほうから始めますと、地震研究所というのは元からは

なくて、あれは濃尾地震のあとで震災予防調査会というのができたのです。これは菊池大麗先生あたりが、あの人はなかなか政治力のある人だとみえて文部大臣などになりましたですね。日本のような地震国では地震のことをいろいろ研究しなければならぬ。そういう研究機関を個人が研究してほかにそういうのをまとめて、先覚者の意見も聞いたりするような会が必要だということで、震災予防調査会が作られた。これは濃尾の地震の直後にできたわけですね。その震災予防調査会はそういう趣旨でできたものですから、いわゆるほかの調査会とは少し違って、調査会といながら自ら研究もする会です。そして研究費の予算もある程度持っていたわけで、建築のほうでゆけば辰野先生とか、古市（公威）先生とか、地質の何とかという先生、物理の長岡（半太郎）先生たちがやって、あとで佐野先生、ほくも入ってそれでどうも前の震災予防調査会のような軽微な研究機関じゃあ駄目だが、相当大きなものを作る必要がある、つまり地震研究所というものを作る必要があるということ。その当時は震災前は震災予防調査会の仕事はほとんど大森房吉先生一人で行っていたのですが、大森先生がたびたび留守にされることと、大森先生が震災予防調査会の仕事をやっておられるが、そのほかに船舶の末広（恭二）教授が地震のほうの研究をいろいろやっておられた。そういう関係で古在さんと末広さんが相談の上で、地震研究所を作ること文部省などの了解を得て予算も取れるようになったが、その時に末広さんがどうもこの間の地震で考えてみても、地震研究所というのは相当強い地震があってもそこで逃げたりなどしないで落

ち着いて研究ができるような構造のものでなければ困る。だからこの間の地震の倍の地震があっても、そこで落ち着いて逃げ出さないでゆっくり研究に専念できるような建物をほしい。そういう建物ができるかしらという話だったのです。

それでほくはできるか、できないかといわれればできる。しかしでかすためにはいろいろの要件がいるけれども、その要件のもっとも必要なのは金であつて金が高く掛かる。ごく簡単にいえば船のキュービクメーターの単価と、建築物のキュービクメーターの単価とでは雲泥の差がある。だから船は波の上に浮いていて相当な振動も受け、動揺もあつてもともかくそれがこわれないで中で仕事ができる。だから船だけの単価を心配してくれば、大体において船と同じような性能を持った家を作ることができる。それだけの予算を取つてきてくれますか、ということを申したので。それじゃあそれでやってみようといったのですが、とても船のほうは高いのだからそういうわけには行かないが、それでも普通の当時の建築費に比較して二割ぐらい増の予算を取つてこられた。これだけしか取れなかつたのだから、これでできるだけのことをやつてくれ、それじゃあどうもしようがないからそれでいろいろ、主として軸部に関することだから軸部の柱とはりとの関係のことをいろいろやつてみたら、当時震災後の建物の設計には、マッスに掛けるホリゾンタルフォースとしては、アキュセレーションのマッスに〇、一倍の十分の一のホリゾンタルフォースを掛けたものに耐えるように作る。そういう程度でもつて満足するより仕方がないということになつたので

すが、震災後の主として震災部長などが動いているいろいろやつたのですが、これは中心になつてそんなことを自然と勢いを付けたのは佐野先生で、佐野先生が一種特別の震災という言葉をし、いま震度という言葉で地震学のほうで使つておりますが、それとはまるで違ふものでほくは佐野先生のいわれる震度はわかりがよくていいと思うのですが、それは地震の力はマッスに働くので佐野先生の〇、一というのは、自分の持つているマッスの十分の一のホリゾンタルフォースが地震の時はマッスのあるところにプロポーショナルに掛かつてくる。そういう考え方です。

だから十貫目の人には十貫目のホリゾンタルフォースが掛かるが、二〇貫ある人と同じ地震にあえばその二倍の二〇貫の力が加わるといふことになるが、それで下町のほうは土が柔らかくて地盤が悪いから相当動揺も大きいので、大きな震動に耐えるようにしなければならぬ。山手の方面はそれが少し少なくていい。その結果として、さつきいった数字が間違つていました。下町のほうでは〇、一、山手のほうでは〇、三、そのぐらゐの震動にホリゾンタルフォースに耐えるように作る。つまり本部あたりは〇、三で……。

村松 あああたりは地盤はいいのでございませう。

内田 本郷はいいほうなんです、それもその後地震学の研究も進んでくると、レンガ造のようところは割合によくはないのですね。

村松 レンガ造はよくないのですね。

内田 そして下町方面のところがかえつてレンガ造は壊れない。

振動は多いけれども壊れない。だけど佐野先生のころは相当古い時代だから現代ででき上がっているようなのは少し違うのじゃないか。

村松 いずれにしても〇、一とか〇、三をポイントを省略して一とか、三というわけですね。

内田 またあとで思い出すと思いますが、それで〇、一というのだと思つたが本郷のほうは〇、一ならいい、下町のほうは〇、三に耐えるぐらい。そういうふうになつたのを地震研究所の建物ではその倍〇、二の震度が働いても差支えないように、差支えないというのもおかしいが、昔の計算の方法によつてですね。

村松 安全率を倍に取つたということですね。

内田 倍にしてやつて、それで軸部の構造が二割増で取れたので、二割増というのは全体の二割増だから軸部だけにすればもう少し大きい。それを末広さんによく説明して了解を得てやつたのです。できたものについては何ともいわなかつたが、念のためどのくらいの地震に持つか見当を付けてみよう。それは結果が出てから説明を聞いたのですが、つまり建物の振動が下と上でどの程度違うか。地面の揺れと屋根の上、つまり軸部を通しての揺れ方がどのように違うかを試験してみたのです。それが地面の上と地下室の床、二階の床、屋根のところを自動計を置きましてやつてみたら、それが小さな地震しかないものですから、小さな地震しかわからないからそれから大きな地震を推定するのですが、あの地震研究所の立つたところの地盤の振動と、屋根の振動とがほとんど変わりはないという結果が出たのです。これは想像した以上に理想に近い構造だ。

あれで安心して仕事ができるという大変お誉めにあつたのですが、恐らく大学の中でいま営繕課のいる建物が一番耐震的じゃないか。それはそういう理由があつたからです。

村松 震度を倍に取つて、耐震性を倍に取つた場合はコストが何割増えるかというのはおもしろいですね。この場合は二割増ですね。

内田 コスト全体の費用から見ましてですね。そういうことになつたのですが、あれは勘定の仕方違いますからね。アサンクションが大きいものだから、ちよつとアサンクションを変えるとパツと変わつてきちゃうから。

村松 地震研究所のいわく因縁の話があつたわけですね。

内田 地震研究所に入る前に大森先生の話ですが、大森先生は大震災（関東大震災）の時には日本にはおられなかつた。ハワイか、どこだったか忘れたが。（オーストラリアか）

村松 私も何かで読んだことがあります。留守にされたというのは有名な話ですね。

内田 向こうで病氣になつて、相当ひどい病氣で頭が痛くて困るというので、死ぬ病氣だとは思つていなくなつたでしょうが、向こうで寝込んでいたらしいのです。大森先生が地震の電報を見て、東京に地震があつたのを聞いて、それは大変だということで医者をとめるのも聞かないで、東京に帰つてきたのです。なぜかという、大森さんの持論として地震の系統があるのですが、今度の地震は自分の考えているどういう系統に属するかわからないけれども、場合によ

ると自分の考えているある種類のものだ。それが脈を引いて相当大きな地震があつたので、今度は関西方面に相当大きい地震があるかも知れない。それは地震の性質をよく調べなければわからないが、それにはハワイにいたのでは駄目なんで、どうしても日本に帰つてそれを調べる必要があるというので帰つてきたのです。帰つてきたが途中でだんだん悪くなりまして、ともかく研究室にゆくことはできない。すぐ病院に入った。三浦内科に入院して、そこで苦勞して帰つてこられてから二日ぐらい経つてからだと思つたが、ほくのところへ教室の人を寄こして、ほくに地震のことについてぜひ会いたいからきてくれというのです。ほくはその時に病氣の状態を聞いてみると、なかなか重体だということです。それはただ行つて会つちやあ悪いから、三浦先生に聞いてみてにしよう、三浦さんに聞いたのです。そうしたら「ちよつと治るとはいえない。多分命取りになる病氣だ。だから重要な要件ならば聞いといたらいと考えられろが、いまの病氣の状態としてはいろいろ難しいことは話をしないほうがいい」ということだったので。ほくは「大分ご重体のようだからもう少し治つてから伺います」といつて断つたのです。そしてその後二度ばかり「ぜひ会いたくからきてくれ」といつてお便りがきたのです。それを断つてゆかなかつたのです。そして三浦先生の助教授かな、相当な人が見えて「とても恢復の見込みはない。あんなに先生が会いたいといつているからお会いになつたらどうですか」、それがいいだろうという話だったので、それでほくは一応三浦先生に意見を聞いてみたほうがいいと思つて三浦先生に聞いたの

です。そして「それは会つてあげたほうがいい。もういく日持つかわからない。何か言い残したいことがあるに違いない。聞いておいたほうがいい。」ほくとして考えれば、ほくは大森先生と一緒に調査の旅などしたことはありますが、直接の弟子でないのですから。講義は建築の教室はその当時は先生が持つておられた。もし大森さんが言い残したいのなら地震学の方面でもつと適当な人がいくらもあるはずだから疑問には思つたが、三浦先生がそういわれるから行つたほうがいいと思つておつたのです。

そして地震学そのものことではなくて、ほくらに多少関係のあることであつたのです。その時に大森さんは「自分の帰つてきた理由は関西方面に続いて大きな地震がありはしないかと思つて帰つてきたが、調査も何もできないで非常に残念だけれども地震はなかつたのだから幸せだつた」というようなことで、その時にはなぜ大急ぎで帰つてきたかわかつたのですが、非常に頭が痛くて治療にあつてゐるお医者さんも隣の部屋にきておられて話をするので、話しながら非常に苦しまれるのです。ほくは聞いていてどうも聞くに耐えないからしばらく休んでもらう。そうするとまた少し落ち着くと言い始めるといつ状態で実に惨憺たるもので、あんないやな気持ちをしたことはめつたにないので、一番主なことはいろいろ切れ切れに言われましたが、それを総合してみますと、震災でもつて水が使えないようになっては駄目だ。現在の状態において最善の方法を決めて、その方法によつて立派に仕事ができるように東京市の水道局長、その当時は何といつか忘れましたが、水道局長に話し

てくれ。そこまでゆくうちにいろいろな思いつかれるまま言われるのですが、大きなトンネルを作って暗渠を作って、その中に水道の管をぶら下げていくらか自由にやれるようなことにして、土が揺れてもすぐ揺れを水道のジョイントに感じないようにするのが、いまの考えでは一番いいだろうと思うから、そういうふうには復興計画、復旧計画を立てるように水道局長に言ってくれ。そういうふうにするには莫大な料金が掛かるので、水道局長にそういうことを言っても取り計り得ないだろう、もつと上の人にいわなければ駄目だろう。水道局長はこのことについては熱心だから私がバックをしていると大いにやるだろうから、ぜひそういってくれ。非常な費用が掛かるけれども、この際思い切ってそういうことをやらなければならぬからという。やはり大森先生はあとから考えると、そういう予算などはどういうふうにして編成されてゆくかは学者だからあまり詳しくないので、むしろぼくのほうがよく知っているくらいだから。途中でいく度も吐きそうになるのです。実際お気の毒で見ておれないくらいですが、それであまりそれを逆つても、ぼくは後藤（新平）さんが復興院の総裁であって、当事者として最高の責任者だから後藤さんに言ったら、後藤さんならそのくらいの力があるからいいだろうと思つてそう言つたのだが、大森先生は「それより實際のことを細かによく知つている水道局長のほうがいい」としきりに言われるので、あまり逆らつても悪いと思うから、そうですかと言つてその話はそれにしたのですが、ぼくはやはり後藤さんのほうがいいと思つたのです。

それでぼくは後藤さんとは市政調査会の関係で相当面識がありましたから、あまり詳しくは知らないけれども、いきなり行つて断られたらいけないと思つたので、佐野先生が後藤さんとはよく近いから、佐野さんに大森さんの話をしたら、「それは水道局長など言つても駄目だ。それは後藤さんにぼくに話をしろといえば話してもいいが、君はそう頼まれてきたのだから行つて話してきたらいいだろう」ということで紹介してくれたのです。それで行つたらすぐ会つてくれたのです。それで（テープ替え）

村松 愛国の志士というか、昔の人は死ぬ間際になつて国のことを思つて……。

——いまの政治家より数段上ですね。

村松 結局それは実現しなかつたわけですか。

内田 実現しなかつたのです。大学の中だけは実現したのです。それからあとで山本総理に会つてぼくは実に感銘したのです。それで後藤さんからきた手紙があるのです。

村松 大正十二年十月二十六日付ですね。

内田 それで玄関まで迎えに行つて一緒になつて、後藤さんは用があるのですぐ外に出ましたがね。

村松 山本総理には大森先生の案をぜひ実施するようという話をされたわけですか。

内田 大森先生のいわれたとおりのことをただ取り次いだだけです。あとからその話を佐野先生にしたら、山本総理が感激され、それで大変乗気になつてくれたわけだというと、「内田君の芝居が上

手だから総理を感激させたのだろう」という話でした。

村松 その時は大森先生は亡くなっていましたか。

内田 まだ生きていたのです。ぼくは大森さんに会うまでは相当時間が掛かったが、会ってからは山本さんに会うまではすぐなんです。

村松 九月一日から十月二十六日ですから二ヶ月近くですね。

内田 後藤さんと一緒に山本総理のところに行つて、後藤さんはちよつと入られただけでじき帰られたが、いかにも待ちかねておられた様子で、ぼくはきつちりした時間より五分か十分前に行つたのだが、ちゃんと待つておられた。それで大森さんに聞いた話をしたのですが、やはり途中で口がきけなくなつたり、頭が痛くなつてものがわからなくなつたりするような状態を含めて一緒に話をしたわけです。「やはりこうすればいい」ということがあるならばぜひそういうふうにはやらなければならぬから、具合のいいような構造にさせるつもりだ」というふうに言われたですね。それでぼくは「ずい分費用も掛かることだからいろいろ大変な面倒もあることだろうと思ひますが、大森先生もあんなに言つていたのでからぜひ実現するようにお運びを願ひたい」と言つて、それから「ぼくはいま大学の復興計画をやつているので、今後は幸いに貴重な資料を失わないですんだけれども、もう少し火事の勢いが強ければどうなるかわからない。大学だけを完全なものにするとはぜひやりたい。大学の復旧の予算などは総理のお耳に達することはないでしょうが、標本のような意味で大学だけはどうしてもやりたいと私は考へております

から、念頭に置いていただきたい」とそう言つたのです。

それでいろいろ話をして、それからもうぼくは病氣はとも見込みはないのだという話をしたので、かなり長いこと話をしましたが、その間に秘書官のような人が二、三回面会人があるということを、それは約束してある面会人だということを言つてきたのですが、初めは少し待つていられるようにと言つてくれといつていたが、三回ぐらいされたものだからしまいは「待てと申すに」と言つたのです。その言葉が非常に、あの人は薩摩ですが、それでいろいろ話が済んで、お忙しいのでおいとまいたしますからといつて出てきようとして立つたら、総理も立つて「いまわれわれが日常接している問題はことごとく耳けがれることばかりである。きょう聞いた話は清水に耳を洗うがごとき心地がいたす。」それに續いて「主治医は有名な三浦謹之助と聞く。従つて治療看護に遺漏なきを信ずるなれども、一層意を用いて万遺漏なきを期されたしと山本が申したとお伝え下さい」と言われましてね。それで帰つたのですが、非常に感激したようです。

村松 大臣としては最大級の言葉でしょうね。

内田 その翌日総理が大学に見舞いにこられたのです。

村松 それは感激されたのでしょうか。しかし涙が出るような話ですね。

内田 それで後藤さんは予算を出して、それが削られてほとんどできなくなつたので九段のところだけにその標本を作るといふので、九段の靖国神社の横の通りに九段坂の途中まで標本を作つたの

です。そういうふうなので山本さんがいたらばできたのかも知れませんが、そうなるかと大森さんの態度が、大森さんがそういう立つ能わざる病気にかかっていながら復興事業のことを心配したというのが山本さんを感じさせたわけだから、それが運悪く間もなく内容がつぶれたのです。

村松 難波大助事件ですね。

内田 だから惜しいことです。後藤さんは自分はやはり金はやすいものでほかに行って説明をされたが、その説明の時に一億円というのが三つあったような気がしたのですが、その一つに東京帝国大学の後は一億円というのがあったのです。地下埋設物の整理一億円、それと同じだけ東大にかけるといふ大変なものだったのです。後藤さんという人は大風呂敷であるけれども、そういう大局に気を使うということもあつたのですね。

——それを佐野先生が芝居だとおっしゃったのだと思います。

内田 芝居だと言つたのは、それから数日後だったかな。丸の内銀行集会所で建築学会の大会があつたのです。それが夜でして、地震に関するいろいろな人の話があつて、その時に突如として停電してしまいました、待ってもなかなかつかないのです。それを電灯会社に聞いてみたら、ことによると二、三十分掛かるかも知れないという話です。どうもその間黙らしておいてみましょうがない。何かやることはないかという話があつて、それじゃあ丁度いい機会だからぼくが山本総理に会つてきた話をしようということでも話をしたのです。

村松 それでですね。

——芝居とかでなくて実績というか、効力は多大だったと思いますね。

内田 それで大学はやりまして、しかしこれは総理のお声掛かりがあつたというわけではないのですが、ただやつたのですが、しかし後藤さんには大森博士の案はいいだろうから、あれをやらしてやれということはいわれたらうと思います。

村松 地震建物のお話からそういう清流に耳を洗うようなという、当時の総理大臣はそういう文学的なものの言い方をされるのですか。

内田 ぼくは原（敬）さんに一度、これは市街地建築物法の施工のことについて簡単な話をしたことがあります、原さんはそうじゃありませんでした。だからあれは山本さんの口調じゃないのですか、鹿児島人の。

——昔の方は漢語、名文をすっかりマスターされておりますから出てくるのですね。

村松 いまの地震研究所のお話を伺つたのですが、あとは東大関係で一応リストに上がっているのを読み上げますから、それにはこういう話があるということ。法文系の建物（法文一号館、昭和十年、法文二号館、昭和十三年）、理学部（理学部二号館、昭和九年）、工学部の総合試験所、柔・剣道、弓道場は屋根のお話で前にちよつと出ましたですね。あとは構内の全体計画で、それで接収の話をいつお伺いしたらいいか。

内田 これは学士会に出したのが相当まとまっておりますし、記憶はいま相当年月が経っていますから学士会に出した時のほうが、あれも相当月日は経っているがあれから引用していただきたいと思うのです。あれは二号にわたっているのです。初めのほうはおもしろくないつまらないのですが、元戦争中に陸軍の少尉が大学にきて土地を貸せということを言ってきたのです。それを断ったのですが大したこともないのですが、それがあつたためにあとのマッカーサーとの話が非常に具合がよいということがあるので、二号にわたっていきまして、初めのほうはいまの日本の陸軍が使わしてくれといってきたのを断つた話です。次の号のは第八軍司令官が、何か・・・。

村松 これは建築士か何かに先生の談話を書いたのが二号にわたって書いていますね。東大関係に一旦区切りをつけましょうか。

——亀井さんにお会いして、実はこういうことをやっていることがわかりまして、「市街地建築物法の制定の前は自分が笠原先生の助手でずい分お手伝いしたのだ。その時の詳しい事情を知っているのはわし一人ぐらいじゃないか」と張り切っていました。いずれご相談することがあるかも知れないといって別れてきましたが、その間の事情を期待して自分も少しはおしゃべりしたような感じでした。

内田 あれにしゃべらしたら限りがない。

——いつもああいうお話が出ますと得意になって土壇場になって話が出まして、私が聞き役でうんざりすることもあるのですが、

大同のことは先生のお話になったので十分だと思ひまして、最近火災が多うございませし、いろんなことを聞きにゆこうと思つて面会を申し込んだら、逆にそれを利用してようとされているわけです。

内田 大同だの、日立の勝田の工業都市の図面があるはずだと思うのです。これは市川君のところにあるのかも知れない。

村松 当時の雑誌に発表されたのを私たちは拝見しております。

内田 三つ大同と勝田のともう一つは何だったか・・・。

村松 六甲か、何かですか。

内田 六甲のは・・・。大同は図面はほとんど引いたのです。勝田のは一度も発表していません。

村松 私たちも第二工学部で講義を伺つたのです。

内田 四、五人で個人展をやつたのがあるでしょう。

——改造計画か、何かおやりになつていようようですが。

内田 これですが、三、四人ぐらいで銀座の紀伊国屋でやつたのです。それが何かの雑誌に出ているのです。戦時中です。戦後じきに死んだのだから。これを安田君が見て、ここのうちにくて安田君が引いたのだと言っていましたね。

村松 日立の中央研究所は（内田）祥文さんは関係ないのですか。

内田 関係ないのです。中央研究所はほとと松下（清夫）君です。あれは大学のと同じように、ほととが大学で二百分の一の図面を引いて実験した最後かも知れない。



これは簡単なことだから忘れないようにしたらいいかも知れない。ぼくは高尾君から頼まれてやったのですが、その時の委員長が何かが高尾君だったと思うのですが。方々見てぼくのやったのを本で見ると、植物園の本館を見て「ああいうものは自分で見たのはいから任せるからしかるべきやってくれ。」それでぼくは日立の気持ちなどをいろいろ聞いてみたのですが、結局ぼくがつかまえた特徴というのは、あそこは外国からものを買ってくるということでもなしに、自分のところで作ったものを外国に出すということに専念して、それであそこの初代の小平浪平、いまこちらに残っている高尾直三郎、馬場桑三郎、国鉄の馬場さんは京都大学に行っているのですか。

村松 いまは自分で事務所をやっておられると思います。

内田 高尾君と馬場君が丁度戦争の終わった時に、高尾君はここの会社の副社長で、馬場君は日立の工場長だったのです。それでパージにかかって二人とも表向きの関係はないということになったが、それで倉田君が社長になったのですが、倉田君は少し性格は違うが、小平、高尾、馬場という三人は相当仕事をする立派な人間であるにもかかわらず、ちつとも名前の知れない人です。小平という人などあれだけの社長で内部で重きをなしているが、一向に名前が知られない。名前が知られないのは外の仕事を全然しないのです。日立だけ閉じこもってやっている。それが日立の特徴で、そうしてどんどん脇に広がってゆく。それで真ん中にこういう一つのものを置いて、中心がなければならぬからタワーみたいなものを置いて、そしてこれを大いに拡張してだんだん大きくして、真ん中にこういう

のがあって、今度はこういうのを一棟、またこういうのを一棟、こっちはこういう太平洋に面して手を広げているような形にしよう。そういうことを話したら、それは大変結構だというわけですよ。そうしようというので竣工式の時久原房之助がきていまして、ぼくはその話をしたのです。そしたらニヤニヤ笑って「うまいこというなあ」と言っていたが、それは嘘じゃないのです。本当です。しかし、ああいうのは計画してもなかなかそのとおりにはいかんものでして、それからあといくつ建てたかどうか。調べてもぼくのいうようにしたかどうか。

村松 さっきの仲間みたいに同志的に小平さんを中心にして馬場さん、そういう方々の仲間みたいな意識で盛り立てて、ずい分特色のあるものですね。そういうイメージをつかまえられるのはおもしろいお話ですね。

——それはやはり先生の勘でしょうね。

村松 私今度日本の技術史を作ったのですが、日立は本にしてくれまして近く出ます。

内田 相当特徴のある企業ですね。ぼくは疑問に思っていて、どうしてこういうことになっているのかと思うのですが、それはあそこは月給が安いのです。ポーンも少ない。それでいて相当いい人が集まる。これはどういうわけだろうと思うのですが、近ごろは月給が少ないとか、ポーンが少ないとかということが、いい人が集まるか、集まらんかの至上の要素になっている。

——最近給料が安くて本当に仕事ができるところに人が集まりか

けている。金だけじゃあ人は集まらない。そういう傾向が出て、いるように感じるので。そこに入って自分がゴトゴトして、自分の専攻が打ち込めるところ、そうするとその人が出世する。

村松 それはあるところまでレベルが達するとそういうことになるかも知れないが、レベル以下だったらほかに行っちゃうでしょうね。

——いまごろ官立大学の人間を引っ張るのは、むしろそういうことがあるのです。トップに立った人がそういうことを考えているか、人集めの策かわかりませんが、金だけじゃあないという空気は出ているようです。

村松 日立の小平記念館は先生がご設計になられたのですね。

内田 そうです。(？)は松下です。日立の中央研究所は多くはバラバラの案で、それがいつでもそういうふうに建てられるようにと、戦時中に仮に建てたのが木造で、木造でも壊さないですむように、将来の多くの計画した配置の間、間をぬってやったのですが、そういうこまごましたものでなくて、まとまった大きなものにした。そうして大きなものになったが、そのほかは相談には乗ったが大体の設計は松下君のほうでしょうね。

村松 戦争中十六年ごろですか、日立のかなり大きな工場を溶接でやっておられる。

内田 これは重要なことです。

村松 助川工場ですか、日本の建築技術史を書いた時に「建築雑誌」を一生懸命調べて、鉄骨の溶接を初期の例として挙げたのです

が。

内田 あれはちよっとおもしろいのがあるのです。当時溶接を日本でも少しずつやって行って、そして少数の会社が満足のものができ、日立は溶接がよくて日立の溶接棒は相当よくて万々で、日立の棒を使うということなら無条件ですという程度になっていたのです。ところがぼくは日立に行ってみて、工場に溶接の工場がないのです。みんなリベッティングのジョイントです。それでぼくは、溶接の状態はこういうふうになっていて、いまの溶接は主にやっているのは船だから船のことだけ考えているかも知れないが、将来は船よりは建築の問題のほうが重要になるとぼくは思う。その理由はあれはちよっと音がしないのです。それで完全なジョイントができる。現場でもう少し上手に溶接ができるようになったら、必ず溶接は建築が主だ、ということになると思う。その溶接のほうをあんたのほうをやっている、棒についてはすでに出色のものができるといふことになっているが、どうも工場にきてみると、溶接は工場の鉄骨を組み立てるには不適當だ、というように宣伝しているように見えるがどうですか、とぼくは言ったのです。「なぜ将来のある建築をやらないのですか」という話をしましたら、高尾君が大いにやろうという気になって、あの人はなかなか慎重にものを考える人で、しばらく間を置いてでしたが、「まあやってみようと思うが、一体どのくらいやったら一般の人が満足できるようなものができるかなあ」というので、ぼくはそうすぐいいものができるわけにはいかんが、まず試験をする意味でもって三つ工場を作る。一つは現在やつ

ているようにリベッティングジョイントとして計算をしつかりして、そのリベットの代わりに溶接をやるということ。今度はリベットではできないメンバージョイントがあるし、またそれでやったほうが経済にジョイントができるというものもある。それを一度にやるのはむずかしいかも知れませんが、それとリベッティングジョイントを半々ぐらいいやつて最後にはリベッティングジョイントには不適當なもの、溶接でやればうまく、安くできるというようなものを一つ作つて、それがうまくできたら、今後は大威張りでこういうふうにできるのだから溶接にしろ、こういう様でつまり三段階で三つの工場をやる。それならどんどんあなたのところの仕事が増えてゆく。のだから、工場も拡張されるだろうから、ぼくならそういうふうを考える、と話をしたので。そうしたらいろいろ考えてみて「結局やつてみようと思う。そういうことを任してやつてくれるよ。うな人があるか」、その時に仲（威雄）君が溶接の講座ができて溶接の担当教授になったときだから仲君にその話をすっかりして「どうだぼくはおもしろい仕事だと思ふからやつてみないか。」それで仲君が溶接をやつたのです。だけどそのあとの二段階はやらないで戦争の影響で死んだのです。いまでもぼくは思ふようにできていないと思ふのです。もっと進んでやるべきだと思ふのです。（テープ替え）

六回を終わります昭和四十三年三月二十三日。次回は四月十三日土曜は午後二時から予定です。（了）

（校訂 中野実・藤井恵介・角田真弓）